The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三十五号の発刊に寄せて
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 2004, 35, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三十五号の発刊に寄せて

伊井　春樹

「詞林」が、この号で第三十五号の齢を数えることになった。あらためてこれまでの三十四冊を並べてみると、かなりのボリュームになり、毎年きちんと年に二冊、よくも続けてきたものだとの感慨を深くし、十七年の歳月が夢のようにかけめぐってくる。私が大阪大学に在籍したのが二十年、それとほぼ同じ年数を重ねて歩み続けたのだといえよう。年ごとの院生の努力とともに、修了して研究室を離れ、それぞれの職場で勤める先輩たちの思いやりが、これまで途絶えることなく持続してきたのだと思う。

大阪大学に赴任してほどなく研究会を発足させ、ほそぼそと活動を続けながら、先輩たちから原稿をいただき、「会報」と称して数ページの印刷物を二号まで出して配布した。まだ16ビット機のパソコンが普及するようになったばかりで、研究費などとは無縁な存在だっただけに、個人で購入し、ドットプリンターで印刷をするしかなかった。これを基礎に、「詞林」の創刊号を出したのが一九八七年三月、院生には自分の原稿は私の部屋で入力させ、私が編集をした後、大阪城近くの富士通のショールームで、知り合いを通じてレーザープリンターを使わせてもらったのだ。ダイレクトオフセットによる、初めての雑誌作りで、ページは貼り込むなどの手探り状態であった。三号以降は、和泉書院から販売してもらったのは、院生の励みにもなり、また世間にも「詞林」の存在が知られるようにもなり、ありがたいご好意であったと感謝している。

実のところ、私はそれほど長く続ける意図はなく、せいぜい十号まで刊行すれば、それで終了するつもりでもあった。私がそのことを院生たちに告げると、圧倒的に反対され、是非継続してほしいとの意見である。確かに世間的にも認められる

ようになっており、研究者や研究機関に送付するたびに激励のことばをいただき、それがまた院生たちの研究への活力にもなっていた。私はその熱意がうれしく、第十号の冒頭に「第十号の発刊によせて」と題したことばを書き、今後も継続することを宣言した。その後は、私は掲載予定の論文の内容をチェックする程度にし、できるだけ院生の責任編集の方針とすることにした。ただ、現在はハードもソフトも安定しているものの、しばらくは次々と新製品の出るのにともない、その対応に試行錯誤の時期が続いた。

私は定年の数年前から、どのように大学から身を引くかという自らの課題とともに、「詞林」をどのようにして終巻にするか、といったこともしきりに気になっていた。号数からすると、三十五号は私がやめた直後の四月に出ることは、計算すればすぐにわかることである。一つのことにあまり恋々としたくないし、一方ではこれまで築いてきた短いながらも伝統が生じており、院生を中心とする研究発表の場としてはきわめて有用でもあるため、自分が創刊したからといって、もはや個人の思いのままにはすべきではないとの考えも存する。とりわけ国立大学の法人化にともない、研究評価とか社会的な貢献が厳しく問われる時代となっただけに、どうしたものかと、苦慮もしていたのが実際のところである。

幸いなことに、荒木浩氏が私どもの大阪大学古代中世文学研究会の会員に加わり、毎回欠かさず参加し、発表する院生たちの指導も熱心にされてくださっている。最近になって、私はおずおずと「詞林」を継続してもらえるかどうかを尋ねると、即座に承引していただいた。私はこれで少し肩の荷がおりたようで、後は彼なりの方法で編集をしていけばよいであろう。さらに「詞林」が発展し、五十号なり、それ以上に号数を重ねていただければ、これ以上の喜びはない。私は四月から大阪大学大学院文学研究科を退くことになるが、ますますの研究会の発展を心から祈っている次第である。